

古典作品を教材とした「深い学び」の実現をめざして

——『枕草子』「春はあけぼの」の授業実践——

武久康高

一 はじめに

「ある物事への学びが深まる」という経験について、石井英真氏は次のように述べている¹⁾。

学び深まったと感じるのは、自明であったものの、わかったつもりであったものについて、その見え方が変わったとき、より腑に落ちたり、新しい視野（地平）が開けた感覚をもてたりしたときではないでしょうか。そうした深まる経験は、創発的なコミュニケーションにより、さまざまな意見が縦横につながり、新たな視点や着想や発見が生まれ出ることでもたらされる場合もあるし、なぜなのか、本当にそれでいいのだろうか、理由を問うたり前提を問い直したりして、一つの物事を掘り下げることでもたらされる場合があります。

確かに稿者にも、これまでの授業経験から「わかったつもり」でいた教材について、改めて「本当にそれでいいのだろうか」と問いなおしてみたところ、全く違った観点からの解釈に気が付き、それま

でとは教材自体の見え方が変わった、新たな視野が開けたという経験がある。そのため、学び深まるとはこういう経験のことを指すといった石井氏の説明は、非常に納得のいくものであった。そして同時に、こうした学びの深まりを生徒が実感できるような古典の授業をやってみたいと考えるようになった。

そこで、小・中学校時代に学習し多くの生徒がわかったつもりになっている『枕草子』「春はあけぼの」を教材とした授業案（高校一年生対象）を作成し、勤務校で実践してみた（高知大学教育学部・専門演習Ⅰ「古典文学ゼミ」〔三年生〕八名）。授業では、わかっているつもり「春はあけぼの」から「なぞ」を見出し、その「なぞ」の探究を通した「深い学び」、およびその結果としてこれまでとは異なる「春はあけぼの」の見え方を実現すること、さらにそこで手に入れた「見方・考え方」を古典の学習や現代社会に対して働かせてみることに、これらのことを目標とした。

以下、実践の概要とその考察を報告する。授業の時間数は一コマ（九〇分）を二時間相当とし、教材である「春はあけぼの」の解釈は拙稿²⁾による。

二 授業の概要

《第一時》

まずは中学時代に学習した「春はあけぼの」の内容を想起し、表紙の特色について各自まとめた。その上で、宿題としていた以下のプリントについてグループで話し合った。

【ここが変だよ、春の段！】次の文章は、中学生の時に学習した『枕草子』「春はあけぼの」である。ここでは春夏秋冬それぞれについての描き方（季節の良さを描くときのことはの選択の仕方）¹が他の季節とは異なるように思う。どのような点が異なるだろうか。

話し合いでは「他の段と違って、春は視覚だけの感覚で書かれている」という意見や「『をかし』や『あはれ』などの語がなく、事実のみが描かれている」という意見、「雲は他の季節でも見られるため、春だけ季節を表す言葉が出てこない」という意見などが挙げられた。これらの意見を受けて本授業では、春の段だけその季節を感じさせる風物が描かれていない理由について【なぜ①】として探究していくこととした。

【なぜ①】なぜ春の段だけ、その季節を感じさせる風物が描かれていないのか？

また授業では、古語辞典を使って春の段を口語訳してくることも宿題としていた。そこで学生たちに「あかりて」について辞書をひいたかどうか尋ねたところ、「明かりて」だと思い込み、誰も引いていなかった。そこで「あかる」について古語辞典で確認した。

あか・る【赤る】（自ラ四）①赤くなる。赤みを帯びる。②赤く熱す。あか・る【明かる】（自ラ四）①明るくなる。「やうやうしろくなりゆく山際すこし・りて」〈枕・一〉②つやがある。

〔参考〕「赤る」と同源であるが、「赤る」は色について、「明かる」は光について用いられる。①の用例を「赤りて」とする説もある。

（『ベネッセ古語辞典』）

このように古語辞典には、春の段の「あかりて」を「明かりて」（光）だけではなく「赤りて」（色）とする説もあると書かれている。ここから授業では、次のことを【なぜ②】として探究していくこととした。

【なぜ②】「あかりて」は「明かりて」か「赤りて」か？

そして、本単元前半で探究する目標を次のように示した。

【探究一】「なぜ①②」（あたりまえだと見過ごしていた本章段の表現に対する問い）を通じて、春の段の表現特性を考えよう。

また、次時までの宿題として、以下のことを指示した。

【なぜ①】を考えるために、人々が『春』の『あけぼの』といえ

ばこれ！」と連想した風物は何か調べたい。『枕草子』と同時代の資料 A～D (A 『大鏡院御集』 三三・三三三、B 『和泉式部統集』 一八八、C 『源氏物語』 野分、D 『源氏物語』 手習) のうち自分が担当するものについて、①傍線部分を口語訳し、②「春」の「あけぼの」という時間帯がどのような風物とセットで描かれているかまとめなさい。

《第二時》

当時の人が「春」の「あけぼの」といえばこれ！」と連想した風物について、当時の和歌や物語をもとに検討した。

【エキスパート活動】担当した A～D の資料ごとにグループに分かれ、それぞれの資料の現代語訳と、そこで「春」の「あけぼの」という時間帯がどのような風物と共に描かれているか話し合った。

【ジグソー活動】それぞれのグループに戻り、担当した資料について説明した。その後、当時「春」の「あけぼの」とセットで認識されていた風物とは何か、A～D の資料をもとに話し合った。

【意見交流】ジグソー班で出た意見を全体で交流した。

以上のような活動を経て、当時、「春」の「あけぼの」といえば主として「霞」を連想していたことが明らかになった。そこから、本単元で探究する【なぜ①】を次のように変更した。

【なぜ①】「霞」が描かれてもよかったのに、なぜ春の段だけ、その季節を感じさせる風物が描かれていないのか？

《第三時》

【なぜ①】については、次の【問】に変換して考えた。生徒に意外性を与え、探究の動機となる葛藤を起こしたからである。

【問】春の段には「霞」が描かれていると考えたい。どうしたらそのことが言えるだろうか。【観点1】【観点2】をもとに、その主張（春の段には「霞」が描かれていること）を説明しなさい。

それぞれ提示した観点は次の通りである。

【観点1】宿題プリントをもとに、この作品は誰に対して書かれ、その「読者の特性」とはどのようなものか捉える。

【宿題プリント】

◇中学生の時に学習した「雪のいと高う降りたるを」(香炉峰の雪)を読み返し、中宮定子の女房にはどんな知識や能力が求められていたか書きなさい。

(本文略)

《参考》

◇『枕草子』の跋文では、『枕草子』成立の経緯を次のように説明している。

内大臣伊周これか(中宮定子の兄)から草子を献上された定子は、「これに何を書いたらいいだろう。天皇は『史記』という本を書写されたのだけだ」とおっしゃっていた。そこで清少納言が「枕はどうでしょう」と述べたところ、定子から

「では、この草子をもらいなさい」と言われた。

一条天皇が『史記』を書写させるのは、書写させた後に自分が読むためである。このように考えると、中宮定子が清少納言に草子を手渡したのも、清少納言に『枕』を書かせた後、それを読もうと思っていたと考えることができる。もちろん清少納言も、中宮を第一の読者と想定して書いたと考えられる。

【観点2】先の「読者の特性」をもとに、春の段（やうやう白くなりゆく山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる）で実は描かれているという「霞」がどういふものか調べたい。そのためには、どの辞書を使って「霞」を調べればよいだろうか。

まずは【観点1】について各班で考えた。これは定子が第一読者としてあったこと、またそうした定子空間では漢詩文の知識が重んじられていたこと（＝読者の特性）を捉えるための問いであった。しかし学生からは、【宿題プリント】から読み取れる「読者の特性」として「定子の言葉に込められた意図を汲み取る能力」などの意見が出た。そのため、そうした定子の意図を読み解く前提として、定子女房には漢詩文の知識が必要とされていたことを確認した。

次に各グループは【観点2】に取り組み、漢和辞典や古語辞典で「霞」について調べた。そこでは漢語の「霞」が「日の出や日没の前後に空や雲が赤く彩られる現象」を意味すること、また古語の「紫」が「紫（ムラサキ科の多年草）の根で染めた色。赤紫色」（『ペネッセ古語辞典』）であることを確認した。

【漢和辞典における霞】（日本の「霞」と意味するものは異なる）

朝焼け。あるいは、夕焼け。《日の出や日没の前後に空や雲が赤く彩られる現象》
（『全訳漢辞海』）

《参考》霞の光は曙^{あけぼの}けて後、火よりも殷^{あか}し

（『和漢朗詠集』春・霞・白居易）

朝焼けの雲の光は、夜が明けるにつれて、火よりもさらに赤くなる。

このように、本章段が誰に対して書かれており、その「読者の特性」とは何か（観点1）を理解した上で、本文に関係しそうな「霞」の意味を捉えること（観点2）。そこから学生は、先ほどの【問】（春の段には「霞」が描かれていると考えたい。どうしたらそのことが言えるだろうか。【観点1】【観点2】をもとに説明しなさい）について考えた。一つのグループの解答例を以下に示す。

【学生の解答例】「やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」は漢詩文の「霞」が表している景色と同じ。「枕草子」は定子、女房たちに向けられて作られており、「霞」という単語を用いずとも、定子や女房たちが漢詩の知識を踏まえてその情景を想像することができると考えた。

この【問】のねらいは、「春の段には『霞』が描かれている」という主張（＝表現の特徴）について【観点1】【観点2】を根拠に論証することであったが、各班とも観点を踏まえた論証をしていた。

《第四時》

【なぜ②】については、次の【問】に従って考えた。

【問】小・中学校の教科書では「あかりて」を光（明かりて）として解釈している。一方、【なぜ①】を踏まえると、赤色（赤りて）として解釈できるようにも思われる。では、あなたは「あかりて」をどのように解釈したらよいと思うか。グループで話し合い、納得できる解釈を考えなさい。

グループ活動の結果については、第三節の考察一で触れる。

その後、授業では【探究一】についてそれぞれ文章でまとめた。

《第五時》

本時からは【なぜ③】を通じて【探究二】を考えることを示した。

【なぜ③】春の段の表現はどのようにして（どういう経緯で）生まれたのだろうか？

【探究二】「なぜ③」を通じて「語り手の見方」を理解し、その見方で世界を眺めよう。

単元後半では【なぜ③】の探究を通じて「語り手の見方」を理解し、その見方で世界を眺めること、つまり春の段の「見方」（古典に特徴的な「見方」）を生徒が実際に働かせてみることを目的としている。

まずは【探究一】で捉えた「春の段における表現のあり方」を一般化するため、外山滋比古のエッセイ「外国語と思考」『もの見方、

考え方 発信型思考力を養う』P11 P文庫、二〇一六）に窺える「見方」を春の段の語り当てはめる、という課題を行った（前時の宿題）。

《外山の見方》多くの人は自分の住む土地に対して固定化した見方しかできないが、トラヴェラーズ・ヴェーを持つ人は、人々が気づかないその土地の良さに気づくことができる。また、こうしたトラヴェラーズ・ヴェーは外国語の知識を持つことによっても発揮されることがある。

次に、以上の「見方」を春の段に当てはめて考えた。

【授業プリント】春の段に当てはめると（《例》漢詩文の知識に基づく）

見方を行う。そのため、人々が春の日常的な様子としてしか見ることができなかった「日の出によって山際が赤くなり、赤紫の雲がたなびく」風景も、（《例》漢語でいう「霞」が出ている美的な風景）として発見することができた。

「春はあけぼの」の語り手は、「自然に対する固定化した見方」とは異なる視点（トラヴェラーズ・ヴェー＝漢語の知識に基づく視点）を持っていたがゆえに、人々が日常のものとして捉えていた「日の出によって山際が赤くなり、赤紫の雲がたなびく」風景を「漢語でいう『霞』が出ている美的な風景」として捉えることができた。つまり語り手は、日常の自然現象（ここでは朝焼け）に「これは漢詩文で描かれている『霞』ではないか」と非日常的な文学言説を重ねてみることで、その美を発見しているというわけである。以上の説明をもとに、学生は自分の言葉で【なぜ③】をまとめた。

《第六時》

【探究2】に関わる課題として、前時に検討した語り手の「見方」を用いて「読者・定子による語り手への応答」を考えた。

【問】秋の夜。白く冴えわたる月の光に「静夜詩」と同様の情景を見て取った定子は、そうした美を清少納言と共有したいと思っただ。そこで、せっかくなら『枕草子』の春の段のような表現形式を用いたいと思い、次のような文を書いたとする。

ここで定子なら春の段にならってどのような秋の段を書くだろうか。定子になりかわって（ ）を考えなさい。

秋は夜。（

【漢詩】静夜詩

林前月光を見る 疑ふらくはこれ地上の霜かと
頭を挙げて山月を望み 頭を低れて故郷を思ふ

ここで学生は「秋は夜。月光は地上の霜かと思うほどに冴えわたる」などの作品を作った。その後、以上のような語り手の「見方」を用いて日常世界を眺めるといふ課題を行った。これは言葉による「見方・考え方」を働かせて古典の学習と社会とをつなぐ課題である。

【問】あなたも清少納言に応答してみよう。

これから1か月をかけて、日常的な風景や自然のなかに和歌や短歌、漢詩文など文学作品で描かれている情景を発見し、春の段にならって書いてみよう。

《手引き》

・和歌や短歌、漢詩文は教科書でならったものでなくてもかまいません。日常の風景に文学作品で描かれているような情景を発見するにはたくさん作品に触れ、それを心にとめておく必要があります。

・また、日常の風景から常に何かを発見しようという心がけておく必要もあります。

課題は後日回収することとし、授業では最後に「春はあけぼの」の表現特性について各自まとめた。なお、ここでの学生の解答については第三節の考察二・三でそれぞれ触れる。

三 考察

(一) 考察一

本授業ではまず、春の段と他の季節とを比較したり、自明視していた「あかりて」の意味を古語辞典などで調べたりすることで、わかっているつもりで春の段から探究すべき「なぜ」を見いだした。

そしてそのうち、本考察で取り上げる【なぜ②】の視点(学び方)

——古語辞典を利用して教材から「なぜ」を見いだすこと——は、その後の古典学習にも生かして欲しい重要な視点(学び方)だとと言える。

現代とは歴史的文化的に異なるコンテクストのもとで生まれた古典教材に対して、我々は現代日本語の語感や意味、あるいは現代の常識をもとに「わかったつもり」になることがある。そのため本単元を通じて学習者には、「たとえ「わかったつもり」の言葉や文章で

あっても、「なぜこの語が用いられているのだろう」といちいちその語感や意味を古語辞典やインターネットで調べてみることに、古典教材の現代語訳がわかる」というだけにとどまらず、自分の思い込みによる解釈を避け、作品をより深く理解するために必要な「なぞ」の発見や表現効果の理解につながることを意識させたいと考える。これはいわゆる「古典の学び方」についての学びである。では、こうした意義があると考える【なぞ②】の問いに対して、学生たちはどのような解答をしたのだろうか。以下、考察する。

【問】あなたは「あかりて」をどのように解釈したらよいと思うか。グループで話し合い、納得できる解釈を考えなさい。

【学生の解答例】

①「赤りて」がいいとする班

・漢詩における「霞」の赤色を表現するため「赤りて」がいい。

②どちらでも解釈できるように、あえて「あかりて」と表記しているとする班

・「明かりて」（光）の場合、「少しあかりて」で区切る。

・「明るくなる空と色づいていく雲のコントラストを表現。」

・「赤りて」（色）の場合、「山ぎは」で区切る。

・白くなっていく山ぎは、それが少し赤くなって赤紫の雲がたなびく。時間の経過を強調。

小中学校の学習を通じて当たり前になっている見方（「だんだん白くなっていく山際が少し（日の光で）明るくなって」と、本単元で学んだ見方（漢語「霞」と「紫立ちたる雲の細くたなびきたる」との類似から、当

該箇所を「だんだん白くなっていく山際が（朝焼けで）少し赤くなって」と解釈する見方）をもとに、自分ならどう解釈するかを考える課題である。学習者は通常、本授業で学んだ方を選択しそうであるが、文脈的には前者の解釈（明かりて）が自然に思えるところからも、学習者に葛藤を引き起こし、より納得できる解釈を求めた活発な話し合いが行われるのではないかと思ひ課題を設定した。

グループ活動（四人×二グループ）の結果、一つのグループからは「読者がどこに読点を打つかで解釈が変わるため『あかりて』とひらがな表記にしている」という意見が出た。これは「春はあけぼの」の内容ばかりに目を向けるのではなく、それがどのように描かれているか（漢字かひらがなか、どこに句読点を打つかなど）についても目を向けたうえで、それぞれの解釈が成立する状況を考えるようになったことを示している。ここで学生たちは、授業で学んだ内容をそのままではめるのではなく（一つのグループはその傾向があった）、再度テキストにかえつたうえで自分たちが納得できる解釈を作り上げている。その過程で深い学びが生まれていたのではないかと考える。ちなみに大半の古典作品はもとも句読点が記されていないので、「どこに句読点を打つか」「この句読点の位置で大丈夫なのか」とい

う視点は、その解釈を考える上でとても重要である。今回は大学生ということもありこうした視点が自然と生まれてきたが、高校で実践する際には「考えるための手引き」という形で叙上の視点を与えても良いと考える。

(二) 考察 一

次に【探究2】についての学生の解答を考察する。

【問】あなたも清少納言に応答してみよう。

これから1か月をかけて、日常的な風景や自然のなかに和歌や短歌、漢詩文など文学作品で描かれている情景を発見し、春の段にならって書いてみよう。

【Aさんの解答例】

夏は夜。鳴きふりなむ郭公。温き夜風にあたりつつ、その声を聞くはをかし。

《和歌》五月来ば鳴きもふりなむ郭公まだしきほどの声をきかばや

(古今一三八)

《解説》夏の夜に窓を開けて温い夜風にあたっていると、外からほととぎすの音が聞こえてきた。もとなつた作品では、その鳴き声を「聞き飽きた」ように描いているが、その鳴き声を聞きながら暑苦しさを実感することで、夏の到来を味わうことができると感じた。

古典に表れている「見方」を現代社会において働かせてみる課題である。「春はあけぼの」における語り手の「見方」は古典に特徴的な「見方」でもあり、それを理解し現代社会において働かせてみることは古典の学習と社会とをつなぐものになると考えられる。

【春の段の表現はどのようにして(どういう経緯で)生まれたのか】

・それまで「春の朝焼け」は、美的な風景として認識されていな

かつた(理由)和歌などあまり表現されていなかった。

語り手は「漢詩文で朝焼け(霞)が美的な風景とされている」とを知っていた。

漢詩文の見方をもとに、語り手は人々が気づかない「春の朝焼けの美」に気づく。

←【これは裏を返すと】

・朝焼け(霞)の美しさを描く漢詩文を知らなければ、語り手は「春の朝焼けの美」に気づかなかつたと言える。

「春はあけぼの」の場合、「漢詩文の見方をもとに、清少納言が自然の持つ美に気づく」という構造になっている。こうした図式(〇〇の見方をもとに××の美に気づく)は和歌に関しても指摘できる。⁽³⁾

藤原俊成はその歌論『古来風体抄』で、花や紅葉の美しさも歌というものがなければ人は知ることがなかつたらうと説いた。

花の美しさが人に歌を詠ませたのではなく、歌が人に花の美を教えたのだというこの自負は、『古今集』以後三百年の歌道の歴史に支えられている。(尼ヶ崎彬『日本のレトリック』)

ここで述べられている「花や紅葉の美しさも歌というものがなければ人は知ることがなかつた」とは、一体どういうことだろうか。尼ヶ崎の議論をもとに考えてみたい。

周知のとおり、和歌世界における「桜」という語はそれだけで、はちきれんばかりの美的含意を後光のごとく背負っている」と言え

る。そして当時、歌と関わりがあった貴族や女房たちは、こうした多様で美的な「桜」の意味を「現実界の桜に投影」していった。つまり彼らは現実の桜を見る際も、それを和歌世界の「桜」の見方に基づいて見ていたのである。この時代における和歌世界（＝詩的想像界）は彼らにとつて、「現実界と同じくらい重要な、そして同じくらい確かな存在感をもった世界」であった。そして彼らは、「むしろこの想像界の見方を投影する」（＝和歌世界の「桜」の見方に基づいて見る）ことよつてはじめて、現実の桜が「美しく立ち現れ、人生の哀れが見えてくる」と考えていたのである。そのため人々は歌を詠み、和歌世界に新たな要素（美的意味）を一つでも付け加えることで、この想像界の拡大を目指してきたのであった。

以上の議論から窺えるのは、想像界（和歌や漢詩文など）の見方に基づくことよつてはじめて、現実が美的なものとして立ち現れるという「見方・考え方」である。これは現代人の「自分の目で見ること」至上主義とも言える価値観とは大きく異なるものだと言える。そのため、叙上の「見方・考え方」（「春はあけぼの」の語り手にも窺えるような「見方・考え方」）をよりリアルな文脈で働かせることで自然に対する学生たちの「見方・考え方」を増やすこと、また今後の古典学習において、彼らがそうした「見方・考え方」を働かせて教材と向き合うことができるような導入の単元とすること、【探究2】では以上のことを目標としていた。

むしろ、こうした「見方・考え方」は古典世界にしかないというわけではない。例えば「聖地巡礼」と言われる、アニメなどで描かれている土地を実際にファンが訪れてみる行為を考えてみたい。そ

こでファンたちは、実際の風景にアニメ（想像界）の情景や見方を投影することよつて、どこにでもありそうなその土地の建物などを美的で美しきものとして立ち上げていく。このように現代にも、叙上の「見方・考え方」はなされていると言える。

では、本課題に対する学生の作品を見てみよう。例えばAさんは「五月来は鳴きもふりなむ郭公まだしきほどの声をきかばや」（五月に鳴くものとされてきたほとぎすの声を、その五月になって新しさがなくならない前に早く聞きたい）という歌に基づきつつ現実世界を眺め、「夏は夜。鳴きふりなむ郭公。温き夜風にあたりつつ、その声を聞くはをかし」という作品を作っている。ここには、本和歌では「五月になると新しさがなくなる」とされているほとぎすの声だが、温き夜風と共に聞くと夏の到来が実感され、案外いいものだった。という実体験が描き出されている。これなどは、古典に表れている語り手の「見方」をうまく働かせ自然を捉えている例と言える。だが、このように、「和歌や漢詩世界の見方で現実世界を実際に眺める」ことよる発見を描いた学生の作品は少なく、そのほとんどが「和歌や漢詩の言葉を用いて枕草子風の文章を作る」ものになっていた（例）「春は昼。光のどけき春の日に花の咲きたるはをかし。花の散りゆくはさらなり。一人儂さを感じるもあはれなり」（ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ）古今集・八四・紀友則）など。これらのことから、【問2】の課題の前に「ここではどんな表現が求められているのか」についてグループで話し合い、もう少し学生たちの理解を深める必要があったと考える。

(三) 考察三

単元のはじめと終わりに「春はあけぼの」の春の段の特色を述べなさい」という【問】を出した。ここでは数人の学生の解答の変化を取り上げることで、彼らが本単元において何を学んだのか検討したい。

《ケース1 Bさん》

【授業前】色彩を感じさせる。情景が移り変わっていくのがわかる。「をかし」などが使われていない。体言で終わっていて余韻あり。視覚中心になっている。

【授業後】「春はあけぼの」の春の段では、他の季節とは違い、春をあらわす言葉がない。春をあらわす言葉として「霞」があるが、ここでは「紫だちたる雲」とある。日本では本来、霞は緑色を帯びていると考えられていたため、「紫だちたる雲」は日本語表現としての霞ではない。なぜ「紫だちたる雲」か考える必要がある。

中国語の表現として、霞とは赤色を帯びているとされている。また紫は、昔は赤紫のことを指していて、ここでは空が色づいて霞んでいる様子が表現されている。「紫だちたる雲」は、日本語ではただの朝焼けの風景だと捉えられるが、中国語では霞の情景を表現していると捉えられる。

清少納言は、春の夜がだんだんと明けようとする頃に空と山を眺めて、趣深いと感じたのと同時に、今見ている情景は中国語で表現すると霞のことを意味することを想起して「紫だちた

る雲」としたのではないかとわかる。ここから清少納言は漢詩文の知識が豊富であり、「枕草子」は中宮定子やお付きの女房など、自分と同じく漢詩文の知識がある人に書かれ、知識を前提としていることから清少納言の優秀さだけでなく中宮の女房としてのプライドも読み取ることができる。

これらのことから、春をあらわす言葉としてあえて直接的に「霞」が使われていないことに、単に季節の美しい情景を述べるのではなく、知識があつて初めて考察できる文章のおもしろさが込められていることがわかる。

【授業前】は中学時代に習った特徴を羅列し、【授業後】は本授業で学んだことについて順を追って記述している。記述からは授業の内容容について理解していることが窺える。Bさん独自の解釈としては、漢詩文に基づいて春の段を書くという行為に対して「中宮の女房としてのプライド」を読みとったり、「直接的に「霞」が使われていない」ところに「単に季節の美しい情景を述べるのではなく、知識があつて初めて考察できる文章のおもしろさ」を見て取る点にあると言える。清少納言は知的でプライドの高い女性というイメージで語られることが多い。Bさんはそうした既有的イメージと春の段の表現特性とを関連づけて理解していったものと考えられる。

《ケース2 Cさん》

【授業前】具体的な例をあげて、季節感を出している。夜が明けていく様子を視覚的にとらえて描写している。

【授業後】 当たり前の日常である春の夜明けを違う目線（漢詩の知識など）からとらえることで特別なものとしてとらえ、それを同じ知識を持った中宮定子なら分かると思い清少納言が書いた。

Cさんの関心は「清少納言は春の段をどのように描いているのか」ということである。【授業前】は「夜が明けていく様子を視覚的にとらえて描写している」とテキストに即して述べるにとどまっていたが、【授業後】は、日常的なものを違う目線（漢詩の知識など）から捉え、それを「同じ知識を持った中宮定子なら分かると思い」書いたと、そこにみられる表現行為をより一般化して述べるようになってくる。このように、授業を通じて事実的な知識が一般化されているところにCさんの学びの深まりを見て取ることができよう。

《ケース3 Dさん》

【授業前】 他の段と違い季節を明確に表す言葉が出てこない。文章量が少ない。

【授業後】 「春はあけぼの」は私たちが今まで学校の授業で学習してきたように文章をそのままの意味で読み取って情景を思い浮かべても十分に楽しむことができる。しかし、今回ゼミで取り扱ったように、清少納言がそもそも読者として想定している中宮定子に漢詩の知識があることを前提として考えると、直接的に季節を表現する言葉が春の段だけないことにもつじつまが合う。その意味では、先に述べた「文章をそのままの意味で読み取っても十分に楽しむことができる」だけでなく、現代でも背

景となる知識があれば清少納言のもう一つの思いが込められた作品として二度にわたって楽しむことができるという特徴を持っている。

Dさんの関心は、春の段に「他の段と違って季節を明確に表す言葉が出てこない」ことである。【授業前】の段階ではそうした事実に対しては「春の段が誰が描いているだけだったが、【授業後】は傍線部のように、春の段が誰に対して書かれているのか」を考慮にいれて読解することで、叙上の問題が解消されたという。そこから春の段の特徴を「文章をそのままの意味で読み取っても十分に楽しむことができる」だけでなく、現代においても背景となる知識があれば清少納言のもう一つの思いが込められた作品として二度にわたって楽しむことができる」ところに見て取るのである。

単元を通じて以上のような「発見」をしたDさんにとって、「この作品は誰に対して書かれているのか」という視点は、『枕草子』に限らず、今後いろいろな作品を読むときに意識化されるであろう。ここにDさんにとっての学習の意義を見いだしたい。

四 おわりに

本単元は、わかっているつもり「春はあけぼの」から「なぞ」を見いだし、その「なぞ」の探究を通して「深い学び」の実現、さらにそこで手に入れた「見方・考え方」を現代社会に対して働かせてみることを目的としていた。その際、『探究1』では言葉による

「見方・考え方」を働かせること——本単元で言えば二つの「なぜ」を通じて表現特性（春の段は誰に対して、何を、どのような言葉を用いることで描かれており、その表現効果は何か）の探究を行った。また【探究2】では、和歌や漢詩文の見方に基づくことで現実世界を美的なものとして立ち現わす、といった語り手の「見方・考え方」を働かせる場面を設定し、その活用を試みた。そして、これらを通じて目指したのがタイトルにもある「深い学び」の実現であった。

「深い学び」に関して松下佳代氏は、その深さの系譜を「深い学習」（単に教えられたことを暗記しはき出すだけでなく、推論や論証を行いながら意味を追求しているか）、「深い理解」（事実的知識や個別のスキルだけでなく、その背後にある概念や原理を理解しているか）、「深い関与」（いま学んでいる対象世界や学習活動に深く入り込んでいるか）の三つに整理している⁽⁴⁾。これを本単元に当てはめてみれば、「深い学習」には【探究1】の活動（なぜ①）ジグソー活動、根拠をもとに春の段の表現特性（霞が描かれていること）を論証する活動／【なぜ②】「なぜ①」をもとに「あかりて」の納得解を班で作成する活動）が、「深い理解」には【探究2】の活動（なぜ③）春の段に表れている「見方・考え方」を一般化し、それを現代社会において働かせる活動）がそれぞれ該当する。

深い学習について 各成果物からは、推論や論証を行いながら同時代の美意識を探ったり、春の段の表現特性を追究している学生の様子が窺える。そのため班活動の過程では「深い学習」が実現しているように見える。だが、そこでの話し合いの記録が不十分であり、個々の学びの深まりについて検証できない。それが反省点である。

深い理解について 例えば考察三のCさんは、春の段の表現特性に

ついて「夜が明けていく様子を視覚的にとらえて描写している」としていたが、授業後はそうした描写を生み出す表現機構に眼を向けるようになっていく。これは春の段を、その表現を生み出した「見方・考え方」（＝原理）に基づき認識するようになったことを示している。考察二で述べたように、語り手の「見方」を働かせて現実社会を捉えられている学生は少なかつたが、このような概念的な理解については多くの学生ができていたようであった。

以上の実践を生かし、今年度中に高等学校でも授業を行う予定である。

注

(1) 石井英真「中教審「答申」を読み解く 新学習指導要領を使用いこなし、質の高い授業を創造するために」(日本標準、二〇一七)。

(2) 武久康高「『明かりて』か『赤りて』か——春はあけぼのの表現方法を探る——」(『日本文学』二〇一九・七)。

(3) ニヶ崎彬「日本のレトリック」(筑摩書房、一九八八)。

(4) 松下佳代「京都大学高等教育研究開発推進センター編『ディープ・アクティブ・ラーニング——大学授業を深化させるために』(勁草書房、二〇一五)。

(高知大学)